

ひとみずむ 19 AYAKA(30)

★母と私の鏡の法則。

もともとリステア時代の堀口さんのブログの読者だった。
店長さん発信のファッションブログなんて当時は、まだ少なかった。
リアルな着こなしが紹介されたり、パーソナルカラーのことを知ったりしたのも、
このブログだった。
毎日帰宅すると、チェックするのが楽しみだった。

2009年になり久しぶりにブログを訪れたら、堀口さんはリステアを退職し、独立していた。
私も独立していた。学習塾を開いている。
勝手な思い込みかもしれないが、その偶然にシンクロシティを感じた。

絶望からの独立。

教えることは、子供のころからちょっと得意だった。
覚えていないのだが、家族の話では小学生のころ、妹にひらがなを練習するための手作りの「なぞりがき教材」を作っていたらしい。

大学卒業後、公立学校の講師を続けていたが、20代後半に心身のバランスを崩し入院した。同時に、講師の職も失った。これまで私なりに精いっぱい努力してきたのに、なぜ評価されないのだろうか？若くて生意気だから？所詮講師だから？社会に必要とされない自分は、何の価値もなくなったように感じて絶望した。

自分の行く末を模索し、もがいているうちに、
学校でなくても私の能力を発揮できる場所はある・・・そう思えるようになった。
家族の協力もあり、雇われることより独立することを選んだ。
そして、独立2年目を迎えた2009年3月に、90日コーチングがスタートした。

イライラの原因。

2009年3月
オリエンテーションが終わり、コーチングで当面扱うテーマがはっきりした。

- ・理性的に動けるようになる。
- ・子供たちの声も聞こえるような接し方ができるようになる。
- ・イライラするところをなくす。

最初、イライラの原因が自分でもはっきりしなかった。
午後、仕事の時間が近くなるとイライラが始まる。

母がフルタイムで仕事をしていたので、私は授業の準備と並行して夕食の支度もしていた。
母は、独身時代から役所勤めをしており、帰りが遅いときの夕食作りは、子供のころから、私の仕事だった。

母は料理上手なので、手抜きはほとんどしない。
だから私には、一汁三菜手作りでなければ・・・、そんな強迫観念があった。

生徒たちが来る時間は刻々と迫ってくる。
なのに、食事も授業も納得のいく準備をしきれない「未完了」な感覚でいた。

「彩香さんも大変だから、その辺伝えてみてもいいのに言えてないんですね」

「ええ、父も母も妹もみんな外でフルタイムの仕事についていますから。
結局は私が受け止めるしかないかなって」

「でも、彩香さん一人で塾されているんですよ。
おうちのことを自分だけにかかえこんじゃってたら、また病気になっちゃいますよ」

一人で背負わなくても、協力を仰ぐこともできるのに、できなかった。

堀口さんのニュートラルに肯定してくれる感じは、自分のありのままを語れた。
すると、おのずと自分のことが読めてくる。はっきりと見えてくる。

今まで学校や塾の先生、セミナーの講師たちが、時折私的を得た発言をした際に、
「すごい！！天才！！」などと、むやみに大げさな承認をしてくれる場面があった。
だが、いつも違和感を感じてきた。承認されることに慣れていなかったし、
どうリアクションをとればいいのかわからなかった。

堀口さんのコーチングには、そんな違和感を全く感じさせない空気がある。

「できてるじゃないですか〜。大丈夫ですよ」
何気ない言葉ではあるけれど、それまでスカイプの向こうで私の話に
ずっと耳を傾けてくれていたことが感じられて、うれしかった。
後で送られてくるフィードバックシートを読むと、さらにそれがよくわかる。

私はきっと自分の苦勞を認めてほしいのだ。
意外と、家族でも何でもない他人に承認されると、自信を持てるのを感じた。

その日の堀口さんからのフィードバックシート。
「家の仕事を頼まれるということだが、結局はやってしまえるので、
逆に言うと彩香さんは、仕事以外でも頼まれごとをこなせるだけの余裕がある人だ。
よくやっている。ということだと思う。いろいろなことができている自分を、
確認して、ねぎらう時間を持つといいかも・・・」

そっか、そう考えればいいのだ。
私は、忙しいのに、料理もこなしている。
しっかりと自分を認められた。

その日私は家族に、自分も忙しい身なのだということを伝えられた。
そして、塾を開いて以来はじめての一人慰安旅行の計画も立てた。

掃除で気分爽快！

2009年3月25日

私は、整理整頓がめっぽう苦手である。
部屋を放っておくと、すぐカオス状態にしてしまう。
あらゆるものが住所不定になっていた。

どうにかならないものかと悩んでいたときに、ちょうど堀口さんのブログで、
友人の方のおうちの片づけをプロデュースした記事がアップされていた。
そこで、コーチングのときに思い切って自分の悩みを打ち明けてみた。
「実は私もおそうじが苦手なんです。それに私の部屋って大人っぽくないんです。
スチールシェルフにとりあえず放りこめるカゴばかりで、インテリアも統一感ないし
洗練されてなくていまだに学生の部屋みたいなんです。堀口さんのお部屋のような
生活感のないホテル風のお部屋にあこがれます」

「部屋にテーマを持たせるといいですよ。統一感が出てすっきりします。
インテリアに洋書を置いたりしていますよ。あと絵を飾るといいですね。
まずは、もの一つ一つの住所を決めることですね。
お部屋の中に“とりあえずボックス”なんてありませんか??」

見回してみると・・・・・・・・・・。

部屋の角という角にカゴが一つ、二つ・・・・・・・・んん???なんと4つもあったのだ。
4つともコンセプト不明。同じカゴの中に書類が入っていたり、鏡が入っていたり、
おまけで貰ったポーチなどが、ぐちゃぐちゃになっていた。
あらためて見ると悲惨な光景だった。
何がどこにいくつあるのかは、あいまいな概念でしかわかっていなかった。

「え〜っと、4つもあります。しかもどれもあふれんばかりで。
掃除しても放り込むだけなので、いつもなんだかさっきりしないんですよね」

「おおお、ありましたか!とりあえずボックスがいっぱいということは、
掃除が完了していないということです。未完了が多いと行動が鈍っちゃうんですよね」

うむむ・・・・・・・・。

未完了が多いと行動が鈍る・・・・・・・・?
未完了が多いと行動が鈍る・・・・・・・・?
未完了が多いと行動が鈍る・・・・・・・・!!

これだったのだ。

私は仕事をするとき、いくつかのことを並行して進めることがよくあるが、全てが中途半端になり、時間をかけていたとしても、不完全燃焼のような気持ちになってしまい、途中でやめてしまう。結局、どの仕事も完了しないことが多かった。ものを捨てきれない、片づけきれないという整理能力の未熟さが、仕事にも現れていたのだ。

もともとなんでもあるという状態が好きなので、物をたくさん集めすぎるし捨てられない。本気で整理整頓しようとする、分類カテゴリが多くなってしまいとても1日では終われない。仕事どころではなくなる。それで結局「大して掃除しない」日々を、送っていた。中でも部屋のイメージを悪くしていたのは、猫にいたずらされて破れかぶれな障子だった。

そんな部屋で落ち着くはずがない。とにかく、気付いた。
わかったこの瞬間に始めなければ！と、気持ちがはやった。

「このあとコーチング終わったら、すぐにホームセンター行ってプラスチックの破れない障子紙、買ってきます！とりあえずボックスも捨てます！」

その日はよく晴れていた。
すぐさま、私は障子を外して庭に運び出した。
ボロボロになった障子紙をすっきり外し、骨組みだけにした。
そしてホームセンターへ直行したのだ。

ペットのいたずらにも強いプラスチックの障子紙に張り替えようかなと、何度も店に見に行ったこともあったが、普通のものに比べて若干割高なので、今まで二の足を踏んでいた。よく考えれば、断然プラスチック製のものがコストパフォーマンスに優れている。

帰ると、さっそく作業にとりかかった。
いつになく集中していたのと母が手伝ってくれたおかげもあり、
1時間ほどですっきり張り替えることができた。

作業が「完了」ということは、こんなに爽快だったのか、と思わずにはいられなかった。あまりにも嬉しくて、早々に堀口さん報告メールを送った。そして、返信があった。

「彩香さんへ 掃除レポ見ましたよ。
面白いので、私のブログ記事にリンクしておきました！
お母さまにも手伝ってもらえてよかったですね！ 堀口ひとみ」

やったあ！！
堀口さんのブログからのリンクのおかげで、
その日のアクセス数はいつもの4倍以上になった。

この頃、新しい彼ができた。
塾を開いて以来、恋愛は二の次だった。
生活時間も夜型だったし、普通のお嫁さんらしいことはできないと
結婚もほとんど諦めかけていた。

そんな折、彼と知り合ったのだ。

バツイチで、教師をしている。息子さんが一人いるが前の奥さんと暮らしていた。

ちょうど桜の季節だった。二人で桜が満開の公園を訪れた。

「うわあ〜。やっぱりいいなあ。ぼくは花の中で一番桜が好きでね〜。

息子の名前にまでつけちゃったんですよ。なかなか会えないですけど元気にしてるかなあ」
満開の桜にストレートに感動し、父親として子供に想いを馳せるところになんとも惹かれてしまった。

聞き上手の彼の前では、私はとにかく自然体でいられた。何一つ我慢する必要がない。

私が仕事で遅くなっても、電話やメッセージに付き合ってくれた。子供とのかかわり方で困ったことがあったり、教授法でアドバイスがほしかったりしたときは、惜しみなく何でも授けてくれて、応援してくれた。

ちょっとした私の気遣いに「こんな人ははじめてだよ」と、大いに感謝してくれた。

やさしくされると、彼のために何ができるかを考えるようになり、自然に何でも気がつき行動するようになっていた。これほどまでに自分の可能性が拡がり、セルフイメージが上がる相手というのは初めてだった。やっと出会えた！！

喜びでいっぱいなのは、仕事にもさらに意欲的になった。

母の意外な返答。

昨今の学習塾は、規模の大小を問わず、教務力つまり、授業のわかりやすさだけでは生き残れない。他の業種と同様、競合するところとの差別化を図ることが、不可欠になる。

でも、ここは田舎。そこまでシビアにならなくてもいいのだが、やはりここは2年目だし、何かイベントをやってみたかった。

ちょうどそのころ私の企画で、高校合格祝賀パーティが成功した。

塾を卒業した子たちと一緒にピザを作ったり、バーベキューをしたのだ。

招待状から手作りし、プレゼントのラッピングも一つ一つ自分で考えてやった。

子供たちがおいしそうにピザをほおぼっていたのを見て感激した。

イベントの企画は、授業や教材を考えるのとはまた別の面白さがあることにも気付いた。

また、生徒が増えたことにともない、コミュニケーションが希薄になっていくことを防ぎたい気持ちもあった。

「塾って、直接サービスをうけるのは子供たちですけど、それにお金を支払うのは保護者なんですよね。だから、お母様方がなにを望んでいるのかを知りたいんです。でも今やっているブログや塾報では、思ったほど反響がなくて……」

「お茶会ってどうですか？女性なら集まりやすいと思いますけど」

「あ、いいですね。この辺の個人塾の先生って男性ばかりだから、お茶会なんてまずやらないでしょうし。そうだ、うちは庭がかなり広いんです。母がいろんな花を植えています。ガーデンパーティやったらすてきですよ。母とコラボかあ〜」

「いいですね〜ガーデンパーティ。お母さんとコラボできるし。コミュニケーションが変わりますよ。いつやりますか？」

堀口さんには、淡々としながら速攻で予定を落としこんでいくスピード感がある。私はあれこれ悩んで結局実現できないことが多いので、こういう姿勢はおおいに学ぶべきところだ。

「え〜と、できれば桜が散らないうちにやりたいですね。でも、母に言えるか自信がありません」

このころまだ母が怖かった。

私には、母に抱きついたり、手をつなぎに行ったりした記憶がない。子供の頃、ほしいものがあっても、すぐにねだることはできなかった。たいていあきらめるか、本当に必要なものなら1週間ほど母の様子をうかがい、機嫌のよいタイミングを見計らって言うのが慣例だった。

友達が遊びに来ると、あとで必ずといっていいほど、

「あの子はあいさつの仕方も知らない。箸の握り方もおかしかった」

「まだ子供のくせに化粧して……」

などと、悪く言う癖があった。

大人になるにつれて、私が選ぶ服からはじまり、就職先、彼氏にまでケチをつけるようになった。

春に付き合い始めた彼について、母に恐る恐る正直に打ち明けたときの反応はまだよかったのだが、あとで写真を見るなり、彼の身なりや車などについて平気で私が傷つくような発言ばかりした。

要するに、私がいいと思うことに母は賛同してくれない……。

私は、これ以上傷つきたくなかった。

できれば、この母とは物理的にも精神的にも距離を置きたいと思っていたのだ。

その2週間後のコーチングの時も、まだ母に切り出せていなかった。

早く言わなければ、春の花の時期が過ぎてしまう……。

そこで、堀口さんとガーデンパーティをやることのメリットを徹底的に挙げていくことにした。

まず、保護者の方のわが子に対する想いを、もっと自然な形で聞き出せる機会があったほうがいい。それと、いつかは普通の学習塾にとどまらず、地域に何かを発信し貢献できるようになりたい。父親、母親ってどんなものなのか？というのも聞いてみたい。

私は、未婚で子供もいない。学校に勤めているころ、未婚の先輩たちが保護者に「先生は、子供育てたことないからわからないでしょう!？」なんて言われてつらかったという話を聞いてきた。第三者の視点だから見えるものがあるので、「お母さんがわからない子供さんの姿を私は知っています」と、答えたいところだが、保護者がそれほどまでに食ってかかりたくなる「わが子への想い」が気になった。あの厳しい母にも私に対する「想い」は、やはりあると思う。

こうして、パーティを開くメリットが増えてきた。

それまでやらない理由ばかり考えていたが、ガーデンパーティは断然やった方が良く、と思えるようになった。

その日の昼下がり、いつものように庭仕事をしている母に何気ないふりをして近づいてみた。いきなり本題は話せなくて、この花は何という名前なのかとか、いつ頃まで咲くのかとか他愛もなさすぎてかえって不自然なやり取りをしばらくしていた。

私は自分の仕事に母を巻き込むことにとっても躊躇していた。どこかで子供の頃と同じように、きっと私がいいと思うことに、母は賛同してくれない。そんな思いが、根強く残っていたのかもしれない。

でも、これを乗り越えれば、塾も私自身も可能性が広がる！

言わなきゃ！

「あのう・・・この庭に・・・生徒のお母さんたち呼んで
ガーデンパーティやりたいんですけど・・・」

前説 30 分。やっとガーデンパーティの話をする事ができた。
なんて返されるだろうかと内心びくびくしていた。

ところが、

「あんた、早くしないと花の時期終わっちゃうよ！」
意外だった。母は昔のような鬼の形相ではなかった。

信じられない。やってもいいってこと？！
それまでずっと、また否定的なことを言われるのではないかと思って胃が痛かったのだが、
その痛みは、すうっと消えてしまった。

私がいいと思うことに、母は賛同してくれない、
というブロックが、このときはずれた。

翌日早々に、ホームセンターへ二人で新しい花の苗を買いにも出かけた。今まではいくぶん
怖い存在だった母とあれがかわいい、これがきれいだななどと花の苗を選ぶのは、とても
楽しく新鮮だった。
ブロックがはずれたからかもしれない。

週末、彼が準備のための買い物に付き合ってくれた。春らしい色遣いのコースターやテー
ブルクロス、それにドレスコードは「お花」としていたので、小花柄のエプロンも買った。

当日は、子供たちも含め 8 名の方々に参加していただいた。ご夫婦での参加もあった。お
話をうかがっていると、親でいることは、どの方もご苦労は絶えないようだけれども、子
育てを楽しんでいらっしゃる・・・そういうスタンスでいると素直ないい子が育つなあ
～と感じた。

次の週末はゴールデンウィーク。私は一人、関西方面へ旅に出た。
知人に子育ての話も聞くことができ、ガーデンパーティやって良かった！
って、さらに思えた。行動すると、新たな展開がやってくる。

この時期、入塾面談でいろいろなお母さん方と接して、気付いたことがあった。
伸びる子のお母さんは、その子の長所をよく知っている。自慢という感じではなく、
失敗したことすら、いとおしげに話す。そして、何というか甘えさせ上手である。
一方、実力がないわけではないのに、伸び悩んでいる子のお母さんは
親がわが子のコンプレックスをあまりにも気にしすぎる。
子供の意見を聞きたいところでも、親がいつもフォローを入れてしまう。

自分がコーチングを受けているせいだろうか？ 発見が多い。
思ってもみなかった自己成長が感じられて、楽しい！！

イライラの鏡。

2009年5月

旅行から帰って数日後、ある子の父親からものすごい剣幕で授業中に電話がかかってきた。
欠席の連絡かと思ってとった。

「うちの子が先生とは合わないのもう受講したくないと言っている。うちの子だけ厳しすぎる。連休の休みのことも自分は知らなかったのでも腹を立てている。このあいだ欠席の連絡をしたときのあなたの対応に愛想がなかった。もうお宅には行かせない！」

震える声で弁解するが、通じない。聞けば、ゴールデンウィークもお休みなのを知らずに来たらしい。4月に子供たちに渡した塾報にお休みのことは載せておいたはず……。
しまった！ きっとあの子は親に見せていない。

彼女は忘れ物や勘違いが多かった。

入って間もないにもかかわらず、厳しい言葉で指導したこともあった。
また、低すぎる目標設定で、同じような子も何人かいたので全員に指導したのだが、
個人攻撃をしたと受け取られてしまった。

私は彼女に対してのフォローができていなかったばかりか、
著しく傷つけてしまっていたことに、保護者のクレームで気付いた。

こちらにも落ち度があったことを認めた。
謝ろうと伺ったが、まるで聞く耳を持ってもらえず落ち込んだ。

そういう保護者はむしろ去ってもらった方が良くと考え退塾とした。
母や彼にも相談したら、同じ答えが返ってきた。

開塾以来、毎月のように入塾生があり、退塾者ゼロだったのが誇りだった。
2年目にして、彼女が最初の退塾者になった。

堀口さんとのセッションで、今回の出来事を徹底的に分析してみた。
相手に求めるから、イライラして叱りつけてしまうことに気がついた。
ときには怒りを腹に収め、子供を信じて見守る姿勢も必要だという考えに、改めることができた。

この失敗を反省し、同じケースを出さないように努めること。
そして、うちを選ばないことがその子の幸福につながると相手が判断するなら、
その選択を認めればいいだけのこと。

コーチングを受けているうちに、いつしか私は自分のことを俯瞰で
とらえようという姿勢ができていたことに、この頃気がついた。

私は母から褒められることもなく叱られてばかりだった。それなのに、生徒たちに厳しい
態度をとってしまった。
できていることを承認されることもないまま、改めるべきところばかり指摘されていては
自己肯定力は育たない。そのことを自分が身をもってわかっていたはずなのに、できてい
なかった。

このときの堀口さんの「相手にされた態度、自分にもないかな？って思うといいですよ」
という視点や、「自分がいつも相手にできることがあったらする、受け取り方は相手次第」
という姿勢はこれからも持ち続けようと思った。

割れたコーヒーポット。

「彩香って、失敗を人並み以上に気にしてしまうところがあるね・・・」
キッチンでお鍋やお皿を片付けようとして誤って、
ドリップしたばかりの彼のコーヒーポットを割ってしまった。

彼との関係は、もう終わりそうな気配だった。
希望を捨てたくない私は、彼のものを壊してしまったことに言い知れぬ恐怖感を
抱きながら、何度も何度も彼に自分の不始末を詫び、泣きべそをかいていた。

「失敗なんて誰でもするさ。ちょうど最近コーヒーメーカーを買おうか考えていたところ
なんだ。自分でドリップしなくていいから楽でしょ？気にする必要なんてないよ」

私が失敗を恐れるのは、きっと承認欲求が強すぎるからなんだと思う。

数日後、私たちは関係を解消した。恋人として、また将来のパートナーとしては
最終的に縁がなかった。

絶対に思い描きたくないことが、現実となってしまった。
彼の最後のフィードバックからいろいろ考えた。

それから一か月ほど、立ち直るのに苦労していた。
精神面をなんとか落ち着けようと、片っ端から人に話し相手になってもらったり、
カウンセリングを受けたりして、気持ちの整理をつけることに努めた。

そうしているうちに、彼に出会えた意味も私なりに、少しずつ見えてきた。
気持ちの整理をつけて、「はあ〜、また経験豊富になっちゃったぞ！！」という
心境になったとき、念願の「一人暮らし」を、決行することにした。

父はいまだに賃貸なんかに住まずに、貯金して一戸建てを建てろ！！
なんて言っているが、母は意外と理解してくれた。
思ったより早く失恋の傷も癒え、今一人がとても気楽だ。(笑)

おわりに

コーチングを通して、知識や技能の提供ばかりが学びではないと、改めて感じた。
堀口さんの承認を支えに、勇気をもって行動することができた。
結果として心の大きなブロックが解かれた。そしてさらに、行動的になれた。
動いたおかげで成功したり、失敗したりもしたが、その分強くなれた。
動いた先には必ず学びがある。自信が生まれるから恐れない、流されない自分になれる。

これからも、今はまだ見つけていない心のブロックに出会うこともあるだろう。
でも大丈夫！！この90日コーチングの間に心のブロックがはずれように、
勇気をもって行動していくことで、ブロックは解かれていくだろうから。